

❖共生の森づくり：モロタイ島の植林現場視察報告書



一般的な植林活動は、森林の保全や環境の改善に貢献するだけでなく、地域の経済や社会にも多くのメリットをもたらすことができます。

モロタイでのモリンガの植林は第二次世界大戦で戦いの場になり、日本軍、米軍を主にした連合軍の抗戦や駐留した跡地の自然の再生が 38 年を経た今でもできていなくて、草原の状態で残されています。

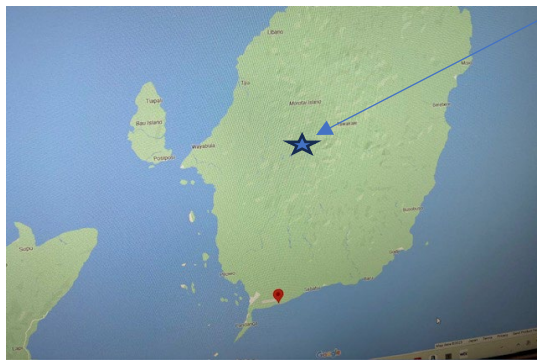
この現地視察の報告書を作成することで、モロタイ島でのモリンガの植林活動の意義や効果をより広く伝えることができることを期待しています。

❖視察の目的と背景

今回の視察は、2020 年 3 月現地訪問を最後に、コロナ禍の感染拡大でインドネシアへの渡航制限があり、植林の現場を実際に確認することができませんでしたが、2023 年 8 月にインドネシアへの渡航制限が解除されたことで現地確認を実施することができました。

一つ目は、2019 年から 2020 年まで北マルク州で、「共生の森づくり」プロジェクトとして、5 畝 5,339 本のモリンガ植林を実施した現場のその後の状況について確認を行うこと、二つ目は 2023 年の新たなモリンガ植林として、第二次世界大戦時の日本軍駐屯跡地への新たな植林の実施状況について、実施現場の確認を行うことにあります。

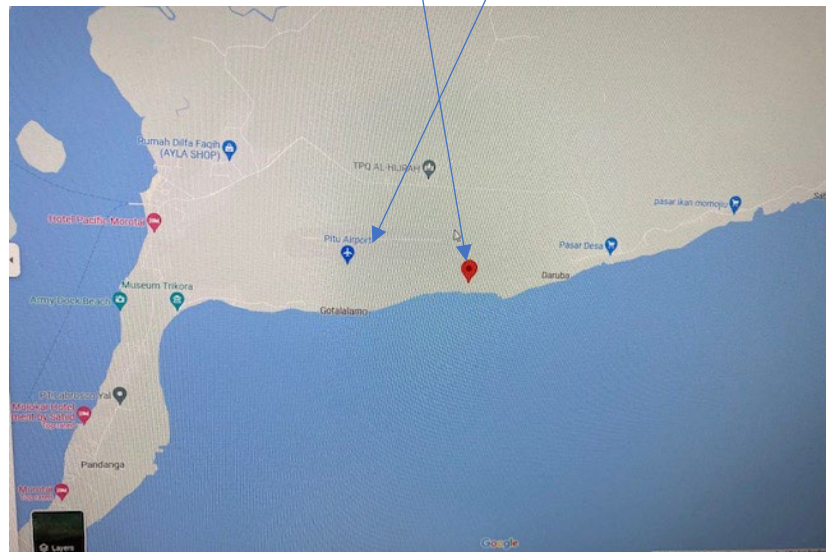
モロタイ島と植林地位置図



中村輝夫さん発見地点

現在のピトゥ空港

今回の植林地



モロタイ島は、インドネシアの北マルク州に属する島です。面積は約 1,800 平方キロメートルで、ほぼ香川県 (1877 km²) と同じ。人口は約 52,860 人。ハルマヘラ島の北に位置し、島は熱帯雨林に覆われ、海岸から山の中腹までサゴヤシの木が植民地時代から植えられて、今でも島の主要な産物のようです。

❖モロタイ島の概要～日本人のほとんどが知らないモロタイ島とは？

モロタイ島は、インドネシア北マルク州に属する島で、日本の香川県と同じような広さ 1800 km²で、ハルマヘラ島の北に位置し、日本には一番近いインドネシア領です。先の大戦で終盤では、日本軍攻略の拠点とされ、戦いの現場となり、終戦時 B,C 級戦犯の裁判が行われました。

モロタイ島と第二次世界大戦

1944 年 9 月 15 日に米豪軍が上陸、抗戦、米軍資料では日本兵 104 名戦死、13 名が捕虜、米軍戦死行方不明 31 名、負傷者 85 名。（最終的にはこの地で散った英霊は 1,712 名）連合軍は米国陸軍 4 万人、空軍 1 万 7 千名を投入し、モロタイ島を攻略、**フィリピン、バリックパパン攻略の拠点**となりました。終戦時の 660 名の日本兵は投降しましたが、一部の日本兵は降伏を知らず、なおもジャングル内で生き延びました。

1956 年に 9 名の日本兵が発見され帰国。**1974 年 12 月 26 日に高砂族義勇隊の中村輝夫さんが発見**され、「日本に帰りたい」という本人の希望もむなしく、台湾に帰国しています。

なお、高砂義勇隊は **500 名在籍**、ジャングルでの消耗戦で終戦時収容されたのは **172 名**であった。

中村さんの活動は現地では好意的に受け入れられており現地には銅像も建てられています。

終戦後、モロタイ島は日本人にとって、かかわりのない島のように思われがちですが、先の大戦では、島の人々を含め、この地での**大きな犠牲のもとに、今があり、わたしたち日本人が生かされていることに感謝し、未来の平和に繋げることが大切だ**と考え、1 本でも多くの木を植える活動～**共生の森づくり**～をしています。

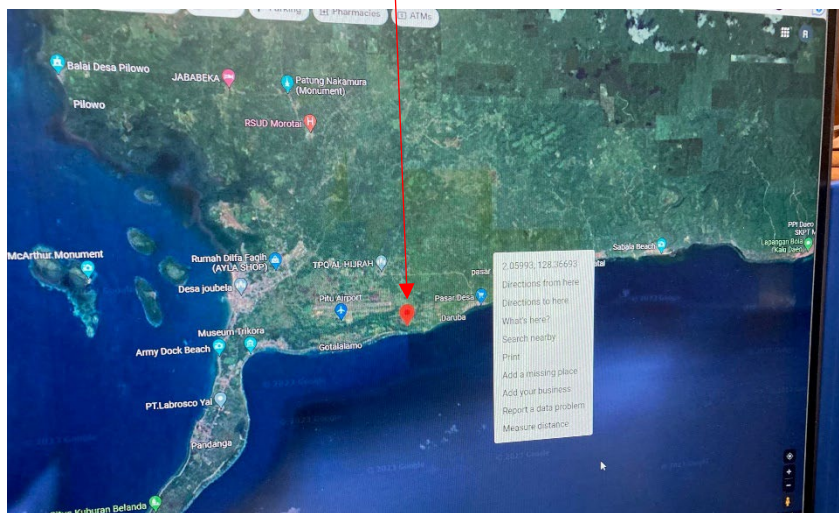
❖視察の方法と内容:

日程：2023年9月19日～28日（飛行機便が週に1便のため1週間の出張になった）

月日	曜	旅程	動性	宿泊地
9/19	火	成田 11:00—マナド 15:50	マナド市内	マナド泊
20	水	マナド 9:15—モロタイ島 14:45（遅延2h）	ダルバへ	ダルバ泊
21	木	Desa Dehigila 中村輝夫氏銅像他	DesaDehinga	〃
22	金	2023年8月植林分視察	植林現場	〃
23	土	今後の植林予定地視察、日本軍激戦跡地慰霊訪問		〃
24	日	ドドラ海岸視察		〃
25	月	ダルバ市内 青果市場他視察		〃
26	火	2020年植林地視察		〃
27	水	モロタイ島 14:30—マナド 15:30	移動	マナド泊
28	木	マナド 02:00—成田 9:50～帰宅 15:00	移動	帰宅

場所：インドネシア北マルク州モロタイ県ダルバ郊外の下記の地図上の位置：

Google map 位置：<https://maps.app.goo.gl/y3e8qvpvmvry257>



参加者:日本より代表理事 宮崎林司、事務局 宮崎サチ子 現地パートナーSajam Sudin

❖視察した内容や手順など

2023年8月に新たに植林を実施した状況の現場確認を行うこと、特に今年は発芽率のいい種子が得られなかったことと、現地では挿し木による植え付けが成長がよいとのことで普及していることから、初めての試みとして2046本全量を挿し木による形で行ったのでその状況確認

を行った。1本1本の現在の状況を確認して歩きまわったが、さまざまな状況ですが、全体の約30%がすでに発芽して順調であった。今後、時間を経ればほとんどが芽吹くものと予想しています。

↓ 植林前の現場の状況

全体で 2046 本 (株)アレン様ご依頼分 全体で約 2 ヘクタール植林済み



↓ 植え付けた状態



↑ 1 カ月余りで芽吹いている挿し木、生命力の強さに感動

発芽状況の確認を行いました。全量確認いたしましたが、ほぼ順調に発芽して、今後 1 カ月で発芽がそろそろものと予想しております。



※2020 年の植林分の状況～残念！洪水被害？



2023 年 9 月には上のような状態でよく育っているものもありました。ここの再生面積は 5 ha ・ 5,339 本の植林を行いました。



← 2019 年に挿し木による植林木が 2020 年 3 月の時点では左の写真のようになっていました。これは地形的に高くなっているところで、育っていたもので これより低い土地に植えたものは洪水で枯れてしまったということで、とても残念でした。

植えた後も放置しないで、手入れを継続することが大切であることが分かったので、今回、植えたものは、以後の管理を行う体制を依頼しています。

今回は、私、宮崎林司の持病からの回復過程であり、移動面などでのサポートが必要であったため、この 10 年あまり、インドネシアでの植林活動や国内での NPO 活動に全面的に協力してくれている家内をモロタイ島での植林現場経験のために同行してもらいました。良き理解者と感謝です。



◇今後の展開について～戦争の遺跡に「共生の森をつくりたい」

第二次世界大戦のときに、日本軍が駐留したところと、米軍と交戦したエリアは自然の植生が失われて 78 年が経った今もほとんど自然が回復することがなく、草原になっている状況です。終戦後、多くは地元民の共有地になっているようですが、ほとんど土地利用がされていません。

特に抗戦のあった地域や駐留地は活用に前向きでなく放置されているのが実情です。今回、モリンガを植えるならと共有地の提供の申し入れがあり、さらに約 6 畝 6500 本の植林が可能となっています。その候補地は直接決戦のあった地域です。この土地も植生が回復することなく草や灌木が生えている程度にしか回復していないのが現状です。

次の展開は、日本軍と連合軍が抗戦をした現場跡地で、面積約 6 畝 6500 本が植えられます。現況は、草と灌木が入り混じった状況で、大半は腰高程度の草が繁茂しています。

地域住民の共有地ですが、過去の経緯から利活用も進まず、戦後 78 年経っても、土地の活用の目途が立っていないので、基本的にみんなが利用できるモリンガ植林は共生の森づくりとして有効だと考えています。

まず、モリンガの森を育てて、地域住民だれもがモリンガの葉や実など健康生活に活用し、余剰があれば様々な製品への活用を開発し、生計のための収益を得られるようにします。

「共生の森づくり」でやりたいこと

✧具体的には

- ① **SDGs 1** : 貧困をなくそう 収入源のない地域でモリンガ 植林・貧困の解決に役立つ
- ② **SDGs 2** : 飢餓をゼロに 母乳に近い栄養価を持つモリンガを食べる習慣の普及で気が撲滅
- ③ **SDGs 13** : 気候変動に具体的な対策を 優れた成長スピードのモリンガのパワー

気候変動の主原因である CO2 をモリンガ 植林で、一般植物の 20 倍 の速さで吸収固定してもらう

- ④ **SDGs 15** : 緑の豊かさを守ろう

植生の豊かでない土地に、モリンガを植え 土壌を安定させ、安定した里山として

地域民が生活できる、緑豊かな環境をつくり、守る。



★みんなで「共生の森づくりで共助の社会づくり」

気候変動による人類の危機的な状況を回避して、より安心安全な地球環境を次世代の子供たちに残すために、一般植物の 20 倍の成長力のあるモリンガの植林を進め、気候変動と飢餓貧困問題に取り組みます、

① モリンガの苗木の無償提供が必要⇒資金と栽培管理の技術協力

② 成長したモリンガの葉や種子などの加工事業を創出する。

⇒資金と技術協力

③ 産物を購入し地元民に経済的なメリットを提供する

⇒販売協力・自己消費で貢献

④ ①⇒②⇒③の循環サイクルをみんなでつくり、



❖次の植林候補地

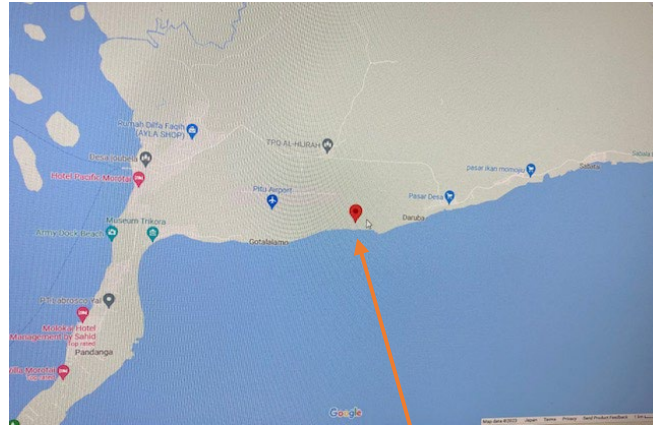
今回の現地訪問で今まで以上に明確になったのは、モリンガを植えようとしても島の大部分は、植民地時代からヤシの林に転換されていること。そして、今もヤシ林がほとんどを占めていて、モリンガを植えるような土地はほとんどない。これまで自分たちが植えてきた土地も戦争時代に軍用地として利用されてきた土地がほとんどであることが今回の訪問でよくわかりました。

今後、日本軍が利活用していた用地跡の草原またはブッシュになったエリアに、地域の人々の生



活向上に役立つモリンガを植えることが、戦争の傷跡を癒し、未来の人たちの平和で健康的な生活に役立つ活動であることをよく分らせてくれるいい機会となりました。

※現在の空港近くの小高い丘のような地形のところですよ。



❖改めて、今、モリンガ共生の森づくりの意味

異常気象による気象災害の頻発、貧困、飢餓など様々な社会問題が地球規模で発生しています。

いまこそ「人間中心の目線」だけではなく、地球の同じ住民として「共に生きる」共存共生の価値観、循環と共生の哲学を持つ必要があります。

人間中心でふるまってきた「不自然」な行動を「自然の摂理」に沿った行動に改める必要があります。

経済至上主義、人間至上主義により、自然の復元力以上に壊してしまった 人間活動を根本から変えなければ、人類の未来は厳しくなってしまいます。 私たちは 2000 年以來、インドネシアで熱帯雨林の再生のための植林活動を 20 年継続してきて、その活動の中で出会うことができた奇跡の木モリンガの普及こそが人類社会をより住みよい環境に未来永劫変えるため、手軽に参加できる効果的な方法として、里山的なモリンガの普及を提案し、活動を進めています。

今回の訪問で明らかになった点は、植えた後の管理監督が大切であるということでした。

今年植え付けたのは、種子による育てた苗ではなく、成木から挿し木材料を確保し、挿し木による植林を試みました。これは、発芽率の良い種子の確保が困難なことと島で行われてきたモリンガの育成は挿し木

による方法がいいとされていることと成長の速さが大きく違うということを 2019 年に植林した比較で明確になったことがあります。そのような経緯で今回は、全体を挿し木による植林方法にいたしました。今後の成長が楽しみです。

2020 年に 5000 本を超える植林を行いましたが、その後の保育管理が不十分であったためにモリンガの生育が確保できなかったり、洪水による被害を受けてしまったことが、誠に残念でした。この反省に基づいて、定期的に現場を管理することや将来展望を明確にして取り組むことが大切であると感じました。今後は現地との交信をより密にしてより良い未来づくりに努めて行きたいと願っています。

今回植林したエリアの保全と日本軍の跡地のモリンガ植林による再生を継続的な植林地の拡大により維持することが、次世代への平和と健康生活を伝えることにつながる～未来への遺産～

危機的な気候変動を防ぎ、より安全安心な地球環境を引き継ぐために

継続的な植林が必要です。 ～完～

～モリンガの地球規模の普及が平和で豊かな地球の再生に役立つ～

追記)

偉大なる先人 中村輝夫さんのこと

モロタイ島に2年半ぶりに訪問して、初めに訪れた場所は、中村輝夫さんの銅像でした。自分がモロタイ島を知ることになった、先人として敬意と感謝の念で訪問をさせていただきました。

初めて訪問した時は、その銅像に書かれている内容も理解していませんでしたが、今回、以下の内容であることがわかりました。改めて、敬意と尊敬、感謝の念をお届けさせていただきました。

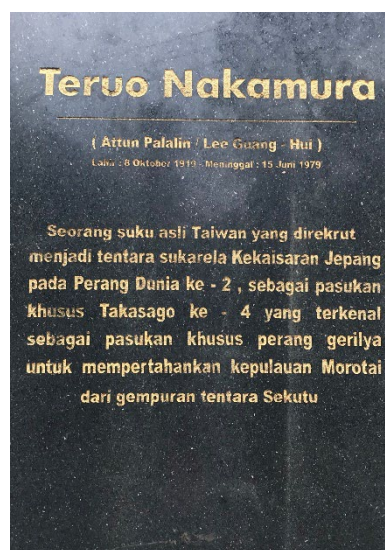
「第二次世界大戦中連合国軍の猛攻撃から
モロタイ諸島を守る特別ゲリラ戦部隊とし
て有名な高砂第4特殊部隊として
大日本帝国の義勇軍に徴兵された台湾人

1919年10月8日生まれ

1979年6月15日死亡」

現地の人々から尊敬されていることがわかり、現在モロタイの人たちが日本人に親しく接して下さることに感謝です。

2023年9月21日訪問



過去30年の補償あまりに理不尽だ

元陸軍一等兵・中村輝夫

日本政府の補償金 **38,270** 円也

帰国に際して、見舞金 420 万円（内訳；日本政府 200 万円、内閣閣僚から 150 万円）このほかに日本大使館職員が 650 米ドルを贈った。

戦争が招いた不幸、失われて時間は金銭に換算できませんが、あまりにも非情な日本政府の対応だ

30

30年^{ひと}独り孤島で戦った日本兵、高砂義勇隊^{たかさご}勇士

Teruo Nakamura

中村 輝夫(李光輝) (台湾・台東県出身) 1919～1979



参考：『還ってきた台湾人日本兵』（河崎眞澄著、文春新書）、『スニヨンの一生』佐藤愛子著、文春文庫）、『日本人の足跡3』（産経新聞取材班著、産経新聞社）ほか

1945(昭和20)年の終戦から27年を経た72(昭和47)年、戦死扱いされていた横井庄一^{よこいしょういち}軍曹がグアム島で発見され、2年後の74(昭和49)年3月には、フィリピン・ルバング島^{おののびろお}で小野田寛^{おののひろお}少尉も見つかり、大ニュースとなった。30年近く独りで戦闘継続していた事実、世界は驚いた。その8カ月後、インドネシアのモロタイ島で1人の日本兵が発見されたが、前述の2人以上には騒がれなかった。大日本帝国陸軍一等兵・中村輝夫^{なかもろてるお}55歳である。彼の存在が程なく人々から忘れ去られた背後に、無慈悲な国際情勢と、30年間に亘った孤独な闘いにも勝る悲劇があった…。

74(昭和49)年12月、モロタイ島で戦った元輝^{かがやき}第2遊撃隊長^{かわしまたけのぶ}の川島威伸は、戦友代表として遺骨収集に行った際、「元日本兵らしき人物出現」の噂^{うわさ}を聞き、現地のスパルディ中尉^{そうさく}に搜索依頼し、後ろ髪を引かれる思いで帰国した。その2週間後、密林^{ジャングル}で旧日本兵が発見され、2600km離れたジャカルタの日本大使館員が飛んで面接。

標準日本語で所属部隊名、階級などを答え、中村輝夫という名や本籍地を漢字ではっきり書いた。彼の毎日は起床後の洗面、皇居遙拝、体操から始まり、三八式銃^{さんぱち}は整備されていて武器尊重の精神^{うかが}が伺えた。現地のサレバサラ大將が、大使館員に語った。「中村を規律厳正で忠勇な日本軍人の生きた鑑^{かがみ}として賞賛すると共に、インドネシア軍の精神教育のテーマとすることを決めた」と。

19(大正8)年、台湾台東県で原住民・アミ族の農家の6人兄弟の末っ子に生まれ、民族名史尼育唔^{スニヨン}、日本名は輝夫。台湾は日清戦争の結果、1895(明治28)年の講和条約で日本に永久割譲された24年後のこと。小学校では野球や相撲^{すもう}好きで成績は全5。42(昭和17)年、



モロタイ島に建つ中村輝夫(李光輝・スニヨン)記念碑

台湾で陸軍特別志願制度が開始されるや即、新婚直後の23歳の中村は血書を認め志願。翌年、妻と生まれたばかりの長男を残し、出征^{しゅっせい}した。

彼と同じく特別志願した、「首狩り族^{いみょう}」との異名を持つ勇猛果敢な原住民部隊は、「高砂義勇隊^{たかさご}」と呼ばれ、兵站^{へいたん}などで奮闘した軍属を含め約8千人が従軍。南方の密林^{ジャングル}に慣れない日本兵に代わり大活躍した。台湾全体では軍人・軍属合わせて約20万人が従軍、3万306人が戦没している。

44(昭和19)年7月、所属した輝^{かがやき}第2遊撃隊は、モロタイ島に布陣。2カ月後、米軍はモロタイ島に上陸。密林に逃げた部隊から、偵察を命じられた中村ら3人は、米兵と遭遇^{そうごう}。左右の戦友が撃たれ彼は、米兵を斃^{たお}し逃亡するも部隊と離ればなれとなり、終戦を知らず潜伏生活が続く。

その間、現地人と知り合い「絶対秘密」との約束で、月1回程「補給」を受けた。その男が死に際に、絶対漏らすなと息子に秘密を打ち明けたことが、旧日本兵発見の発端^{はつたん}となる。

中村発見に日本政府は困惑。2年前の72(昭和47)年に、中国と国交回復、台湾と国交断絶していたからだ。大陸への忖度^{そんたく}で冷遇された中村は、台湾へ帰国。「戦死者」生還に歓迎されたのも束の間、妻から再婚していたと告げられ、衝撃^{しゅつげき}の余り歓迎会場から脱走。その後、「夫」が身を引き妻と「再婚」。日本語が禁じられた国民党支配下で名を「李光輝^{りこうき}」と変えられ、日本語が使えず苦しむ。密林で30年間無病だった中村は、文明生活4年

で肺癌に倒れ「日本に帰りたい」の言葉を最後に59歳で死去した。

モロタイ島では、中村は英雄のままだ。「ナカムラ通り」「ナカムラ小学校」が造られ、彼が発見された場所には、銅像が建てられている。(文/小野敬)